

現代日本における統治／道徳／知

三崎 和志

(慈恵会医科大学)

本報告では、現在の日本にみられる道徳をめぐるコンフリクト—〈道徳の溶解〉現象と〈道徳をふりかざしての一方的非難・断罪〉—を出発点に、これらのコンフリクトを現代国家の統治の問題との関連で考察するとともに、価値・道徳と知・真理の関係について原理的に考察を加える。

ネオリベラリズムのグローバルな進展の只中にある現代国家をヨアヒム・ヒルシュは「国民的競争国家」と特徴づけた。それはある種の「市場自由主義的国家統制主義」、すなわち国際競争の中で勝ち抜けるよう社会的資源を投入するために、国内での市場化、競争的秩序化を権威主義的にすすめる国家である。

クラウス・オッフエは、現在の資本主義国家の機能様式を理解・正当化する理論のひとつとしての「グローバルな金融市場に駆られるポストデモクラシー」を、〈不完全〉で〈半分〉の理論でしかないという。グローバルな金融資本主義の中での国家間競争を優先事項とする国家は、ある政策がたとえ国民生活に負担をかけるものでも生き残りのために必要ならそれをおこなわざるを得ない。その際、その現実的必要性のロジックを説くことができても、たとえば〈進歩〉、〈公正〉、〈自由〉、〈安定〉といった、〈それは何ゆえ善いのか?〉という問いへの回答、規範的正当化を与えることができない。現在の先進資本主義国家の統治は、核となる指導的規範を持ち合わせない状態にある。

そういう統治原理をとる国家において規範はどういう方向をたどるか。大きく二つの方向が考えられる。

ひとつは市場での成功をそれ自体〈善い〉とする、という方向である。本来、市場の競争は決して道徳的価値を決定するものではない。ましてや現代の現実の市場は、出発点での平等といった古典的自由主義の規範的前提すら欠いている。それぞれが持てるだけの資源を最大限利用し、最大限の効果を収めればそれでよい、ということになる。縁故があれば有効に利用し、結果がともなえば炎上商法も許容される。

この種の発想は市場での振る舞いを越えて通用している。成功のために求められる資源の効率的な利用を計算する道具的な思考。特定の価値観を持っていることは効率的な方策を発想、実行するうえでむしろ邪魔になる。脱価値化された、プラグマチックな態度が身に着けるべき〈新たな徳〉となる。この事態は〈道具的思考の道徳化〉と捉えることができる。そして、この価値観ならざる価値観を内面化した人格は、ある種の「権威主義的パーソナリティ」の特徴を帯びる。

他方、競争とは原理的に誰もが勝者になることはないゲームである。市場的価値観が市場を超えて浸透し、競争原理が広がれば、結果、不遇をかこつ者もそれだけ増える。そこに出来ないではない不満・反抗・抵抗を押さえつけるために道徳が動員

《シンポジウム》

「知の変容とモラルの溶解——道徳的分断を乗り越えるために」

される。効率化の中で負担を押し付けられた者は、身に着けるべき〈新たな徳〉の欠如のせいだとして、あくまでも個人の責任に帰すと同時に、滅私奉公的な〈古い徳〉の援用によって反抗・抵抗を不道徳なものとして非難される。共同体的維持のために構成員がその立場に応じて果たすべき義務を負うという、新しい徳が掘り崩しつつある〈古い徳〉が、現在の秩序維持の道具として利用される。この事態は〈道徳の道具化〉といえるだろう。

現今のいわゆる自己責任論とは、以上の2つの要素の混淆ではないか。つまり、不遇な状況とは当人の能力不足の結果であり、〈あらたな徳〉をじゅうぶんもちあわせない者自身が悪い、そして、そういう者のすべきことは、社会全体を騒がせたりして迷惑をかけるのではなく現在の自身の境遇に甘んじろ、ということだ。

大学も、こうした動きと無関係ではない。私学、国公立問わず生き残りのための戦略が求められ、学生を〈確保〉するための策に頭をひねり、国内外のランキング、文科省や民間からの予算・研究費獲得のための研究・教育プランや組織改革が求められる。学生の種々の選択では、は就職に有利かどうかという考量がますます大きなウエイトを占める（奨学金の返済を考えればそれはなおさら死活の問題となる）。大学における〈知の探求〉も、やはり〈新たな徳〉によって浸食されているように見える。

しかし、そもそも知と道徳はいかなる関係にあったか。この問題は簡単ではない。体制による思想弾圧・統制から解放された戦後日本では、真理の追究は特定の価値観によって歪められてはならず、〈純粹〉なものであるべきという観念があり、同時にそうした真理追究による学問の発展が社会進歩と結びつくという予定調和的な希望があった。しかし、そもそも明治維新の時点で学問は殖産興業、立身出世といった世俗的成功を目的とされてもいた。

近代の始まりにおいて、フランシス・ベーコンは自然支配の威力という以外にもいくつかの目的をみとめていたが、知、真理を価値観、道徳から自由なものとして切り離す議論、ヒューム、新カント派（その影響下にあったマックス・ウェーバー）、現代の実証主義など、近代において有力である。それは一種の近代的な世界像の分化の帰結ともされる。真理と価値の関係は原理的にはいかに把握されるべきだろうか。

アドルノは戦後ドイツ社会学における実証主義論争の脈絡で、認識する理性と評価する理性とは同一のものであり、価値と認識の絶対的分離は不適切であるとの立場をとっている。アドルノの真理論をふまえてアルブレヒト・ヴェルマーは真理と価値の関係について、「哲学で問題なのは、正しい世界理解と自己理解であり、正しさの基準は、世界がそれ自体としてある構造ではなく、我々の言語実践の内に根を下ろしている正しき生という理念である」、つまり真理は最終的には正しき生という理念という価値を基準としていると述べる。報告者もその立場に立つ。報告においてその意味するところを詳論したい。